

# 女子大学生における非行少年の更生に対するイメージと 性格の関連

The relationship between the image to the rehabilitation of  
a juvenile delinquent and the personality in female university students

松本 千尋  
跡見学園女子大学大学院  
人文科学研究科臨床心理学専攻

Chihiro Matsumoto  
Division of Clinical Psychology,  
Graduate School of Humanities,  
Atomi University

## 要 約

本研究の目的は、女子大学生において、性格傾向の違いにより非行少年の更生に対するイメージに違いがみられるのかを明らかにすることであった。調査協力者は、X 女子大学に通う3年生から4年生290名で、質問紙調査を実施した。その結果、5次元の性格傾向とSD法により測定した非行少年の更生に対するイメージの得点において有意な差は見られなかった。有意な差が見られなかった主な要因として、形容詞対の選出に至らない点があったこと、また5次元それぞれの性格傾向における人数に顕著な偏りがあった点が挙げられる。したがって、今後の研究においては、より具体的な形容詞対の選出を行うと共に、女子大学だけでなく複数の他の大学においても調査を行う必要性がある。

【Key Words】女子大学生，非行少年，イメージ，性格

## I 問題と目的

非行少年や犯罪をおかした人に対しては、表面化した行為だけにとらわれず、さまざまな背景要因やその相互作用を明らかにすると共に、非行や犯罪が本人にとってどのような意味を持つものであるかを理解することが必要とされる。これは、成長発達上のつまずきとして非行をとらえ、その立ち直りを社会で支えていくという少年法の考え方にも考慮されていると考えられ

る。しかし、近年司法に触れた少年に対する厳罰化が進んでいる傾向にあり、とりわけ重大な少年事件では「子どもとはいえ、大人と同じ刑事責任を求めるべき」との声が大きくなり、裁判員裁判の対象となる少年事件では、少年法の理念から離れて厳しい刑事処分が求められる傾向にある(日本の子どもを守る会, 2017)。また、大庭(2010)は、非行・犯罪についてのイメージはほぼメディアによって構築されており、そのメディアにおいて構築された犯罪や犯

罪者に対して人々は非難し、自らの犯罪に関するリアリティをつくりだしているという問題意識の下に、朝日新聞の記事から少年事件に関する言説の変化を追い、加害少年がどのように語られるかについて分析し、少年へのまなざしの変化と厳罰主義について議論している。その結果、犯罪ニュースにおいては、報道される罪種が「凶悪化」と同時に、犯罪を引き起こす少年イメージが「一般化」されるようになったこと、また犯罪事件を引き起こす人間に対する厳罰化を求める風潮もこのようなメディアにおける非行・犯罪のイメージの構築と無縁ではないことを報告している。このことは、非行少年や犯罪をおかした人に対する誤ったイメージを助長させることにつながりうると考えられると共に、イメージというものがいかに人々の中に浸透しやすく、且つ影響を与えやすいかを物語っているといえよう。また、非行少年や犯罪をおかした人とイメージ、あるいは社会一般から見た非行少年や犯罪をおかした人に対するイメージに関する研究は、これまでに多くなされている。岡田・安藤(1994)は、人々がどんな犯罪者イメージを持っており、そして「犯罪」や「犯罪者」のステレオタイプ化されたりファレントについてどのように考えているのかということをも明らかにしようとした。その結果、「あなたは以下に挙げるような人が犯罪をおかしやすいと思いますか?」と問われた人々は「犯罪」といった場合に「殺人や強盗など、凶悪な犯罪」を主にイメージし、逆に汚職という犯罪は、あまりリファレントにならない犯罪であることを明らかにした。また、汚職と社会的評価の高い職業との関

係など提示された犯罪行為の特徴を明示しているデータを得たと報告している。また、岡本(1997)は非行少年が少年院収容者に対しどのようなイメージを抱いているか、また社会一般の人々が少年院収容者にどのようなイメージを持っているかについてSD法を用いて調査し、非行少年と社会一般の人々それぞれが抱く少年院収容者に対するイメージについて比較している。その結果、非行少年が少年院収容者をどのようにイメージしているかということを知る一つの手がかりを明らかにした。久原・宮寺・藤原・小林(2016)は、イメージについて「抽象的、一般的な形容詞句で測定される行動の準備状態」という操作的定義をおき、教師が抱く非行少年への対応に対するイメージを明らかにするために、イメージと個性的な対応に対する態度および共感性との関連について検討している。その結果、父性原理と母性原理の両立を重視する教師は、少年の立場に立って物事を考えたり、少年の気持ちに寄り添ったりすることができる傾向にあるために、少年にとって効果的な指導ができると報告している。また、西村(1982)は、非行観の世論調査において簡便な項目ではなく、詳細な項目を出題することにより、社会各層間における非行観の比較を試みることで社会各層の持つイメージの特徴を明らかにしている。この続きの研究として、17歳の普通の少年が個々の社会的逸脱行為をしたと仮定し、その行為の非行度の評価とその少年の取り扱い方の違いから行為を類型化することで、社会各層の持つ評価と社会的対応の特徴を記述している(西村, 1983)。

ここまで主に非行少年や犯罪をおかした

人に対するイメージについて述べてきたが、そもそもイメージとは何だろうか。心理学用語におけるイメージは心像ともいい、言語以外の内的な表象を指すとともに、感覚や記憶とは区別されるものであるとされている。しかし、巷間におけるイメージは、もう少し広い意味で使われるようである。観念、時には概念(コンセプト)を含むものとして使われる。このように、意味を拡張してまで多用されるのは、イメージという語が、1にソフトな響きを持つからであり、2にそれが理性的基礎を持たず感性の性質を持ち、浮かんだり、消えたりして、使う者にとって便利だと思われるからである(西村, 1991)。本研究においては、以上の意味に加え、社会的風潮や社会的支配、個人独自の思想、個人の深層心理を反映したものをイメージとして扱うことにする。また、思想や心理などに影響される主なものの一つとして性格が挙げられると考えられる。特に、各個人の性格を程度の差に基づいて分類することで、それぞれの性格傾向において異なるイメージの傾向が見出されるのではないかと推察される。性格傾向の違いによって非行少年に対するイメージの差を見出すことは、非行少年に直接かわる人の性格を考慮し、その傾向に合ったタイプの非行少年と関わることでより適切な対応を行うことができるようになるのではないかと考えられる。しかしながら、以上の先行研究から性格と非行少年に対するイメージの関連について検討したものは見当たらない。

そこで本研究では、女子大学生において、性格傾向の違いにより非行少年の更生に対するイメージに違いがあるのかを明ら

かにすることを目的とする。

## Ⅱ 方法

### 1. 調査期間

調査期間は、2017年6月12日～6月29日の間の3日間である。

### 2. 調査協力者

調査協力者は、X女子大学の3～4年生である。

### 3. 調査方法

調査方法は、計4つの講義時間後を利用し、質問紙調査により実施した。340名に研究への協力を依頼し、340名から調査協力の同意を得られた。このうち、50名は記入漏れのために分析の対象から除外した。したがって、有効回答数は290票であった。

### 4. 調査票

調査票は、(1)フェイスシート、(2)SD法、(3)Big Five尺度(和田, 1996)により構成された。用いる項目の内容は以下のとおりである。

#### 1) フェイスシート

基本的情報として、年齢、学年、学部、学科を尋ねた。

#### 2) SD法

Osgoodらの研究において、意味空間を構成し、意味を記述するために用いられる形容詞対の中でも最も重要とされる、評価、力量、活動に属し、且つこれまでの研究においてそれぞれを代表するとされるものを最低ひとつは含まれるように構成した(計12項目：よい－わるい、強い－弱い、速い－遅い等)。質問紙には、「非行少年の

更生について、以下の項目はあなたにどの程度あてはまるでしょうか。もっともあてはまると思うものの縦線部位に○をつけてください。」という説明を記述した。

### 3) Big Five 尺度 (和田, 1996)

性格特性の基本5次元を測定する尺度である(計60項目:話し好き, 悩みがち, 独創的な等)。基本5次元とは, 外向性, 情緒不安定性, 開放性, 誠実性, 調和性の5つの因子を指す。

### 5. 統計解析

本研究の目的である, 女子大学生における, 非行少年の更生に対するイメージが性格傾向と関係しているのか解析を行った。分析ソフトはエクセル統計を用いた。

Big Five は5つの特性をはかることになっており, 且つその中で最も高い特性がその人の性格により近いものであると考えたため, 女子大学生をそれぞれ Big Five 尺度における5次元の性格特性に分類し, その次元ごとにSD法の得点を一要因分散分析を用いて検討を行った。

### 6. 倫理的配慮

目的や手続きの説明を行い, それに対する同意を得た上で研究を実施した。この

際, 調査への協力は辞退可能であることも事前に伝えることで, 調査協力者の自由意志を尊重するように努めた。また, 表紙に使用目的を明記し, 質問票に記入をすることで調査についての同意を得たと判断した。この質問票には個人が特定できるような情報を除くことで, 個人が特定されないように配慮を行った。

## Ⅲ 結果

### 1. 調査協力者の基本的属性

調査協力者の基本的な特徴は次のとおりである。調査協力者の6割以上が文学部の学生で構成されており, 学科は臨床心理学の学生が最も多く占めており, 学年は3年生(37.2%), 4年生(62.8%)で構成されている。

### 2. 性格特性の Big Five 尺度と非行少年の更生に対するイメージの得点との一要因分散分析

調査協力者を, 5次元の性格傾向である外向性(56名), 情緒不安定性(149名), 開放性(21名), 誠実性(6名), 調和性(46名)の中で合計得点が最も高いものに分類した。その後, それぞれの次元において, SD法により測定した非行少年の更生に対

表1 5次元の性格傾向とSD法の得点の平均値における一要因分散分析結果

	平均値	標準偏差	F 値	有意差
外向性	2.93	0.53		
情緒不安定性	2.93	0.6		
開放性	2.89	0.45	0.38	いずれも有意差なし
誠実性	2.85	0.72		
調和性	3.03	0.6		

するイメージ得点の平均値の差を、一要因分散分析を用いて検討した。その結果、5次元の性格傾向とSD法の得点の平均値では有意な差が見られなかった。

### 3. 5次元の性格傾向におけるSD得点の平均値

#### 1) 外向性群におけるSD得点の平均値

最も得点の高い形容詞対が「容易な～困難な」であったのに対し、最も得点の低い形容詞対は「危ない～安全な」であった。この結果から、外向性群においては、非行少年の更生について難しく、危険が伴うというイメージを持つと考えられる。また、「静的な～動的な」における得点も最も得点の高いものの付近に位置していることから、動きに富んでいるというイメージも持っていることも考えられる。

#### 2) 情緒不安定性群におけるSD得点の平均値

最も得点の高い形容詞対が「容易な～困難な」であったのに対し、最も得点の低い形容詞対は「危ない～安全な」であった。この結果から、情緒不安定性群において

は、非行少年の更生は難しく、危険が伴うというイメージを持つことが考えられる。また、「静的な～動的な」における得点も最も得点の高いものの付近に位置していることから、動きに富んでいるというイメージも持つことも考えられる。

#### 3) 開放性群におけるSD得点の平均値

最も得点の高い形容詞対が「容易な～困難な」であったのに対し、最も得点の低い形容詞対は「危ない～安全な」であった。この結果から、開放性群においては、非行少年の更生について難しく、危険が伴うと

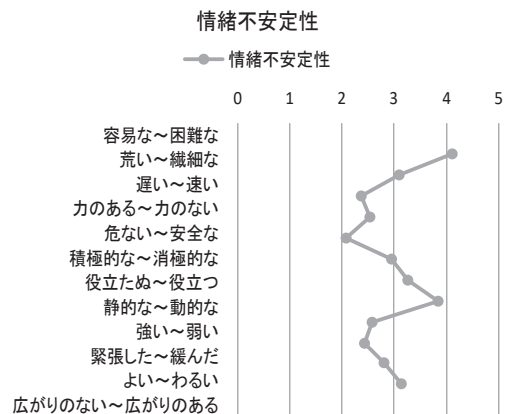


図2 情緒不安定性群におけるSD得点の平均値のグラフ (N=149)

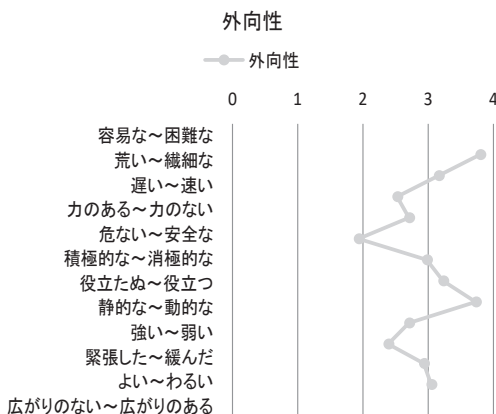


図1 外向性群におけるSD得点の平均値のグラフ (N=56)

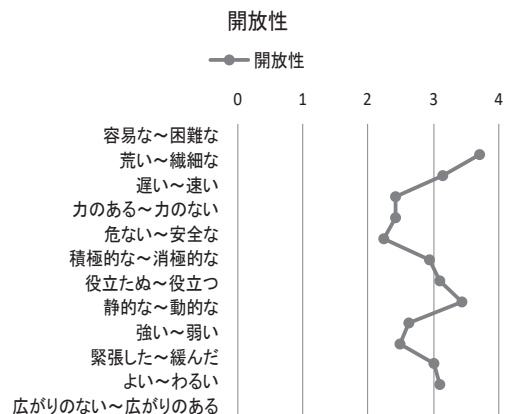


図3 開放性群におけるSD得点の平均値のグラフ (N=21)



いうイメージを持つことが考えられる。また、「静的な～動的な」における得点も最も得点の高いものの付近に位置しており、且つ「遅い～速い」や「力のある～力のない」における得点も最も得点の低いものの付近に位置していることから、動きに富んでおり、時間はかかるが更生への力はあるというイメージも持つことが考えられる。

#### 4) 誠実性群における SD 得点の平均値

最も得点の高い形容詞対が「容易な～困難な」であったのに対し、最も得点の低い形容詞対は「危ない～安全な」と「強い～弱い」であった。この結果から、誠実性群においては、非行少年の更生について難しく、危険が伴う、強いというイメージを持つことが考えられる。また、「積極的な～消極的な」における得点も最も得点の高いものの付近に位置していることから、更生に対して消極的であるというイメージも持つことが考えられる。

#### 5) 調和性群における SD 得点の平均値

最も得点の高い形容詞対が「容易な～困難な」と「静的な～動的な」であったのに対し、最も得点の低い形容詞対は「危ない

～安全な」であった。この結果から調和性群においては、非行少年の更生について難しく、動きに富んでいることに加え、危険であるというイメージを持っていることが考えられる。また、「緊張した～緩んだ」における得点も最も得点の低いものの付近に位置していることから、更生には緊張感が伴うというイメージも持っていることが考えられる。

#### 6) 5次元の性格傾向における SD 得点の平均値

どの群においても、最も得点の高いもの

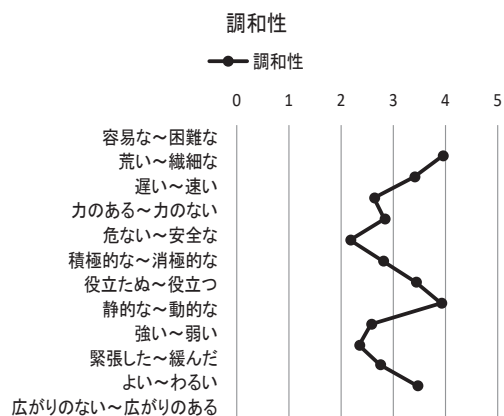


図5 調和性群における SD 得点の平均値のグラフ (N=46)

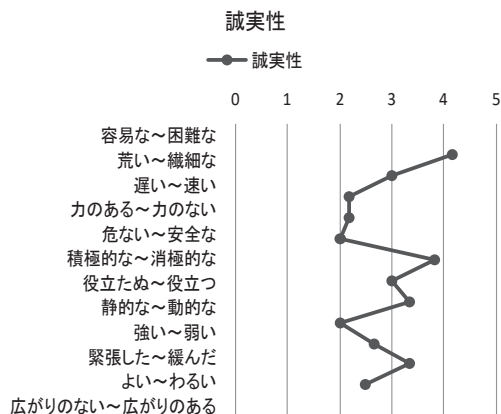


図4 誠実性群における SD 得点の平均値のグラフ (N=6)

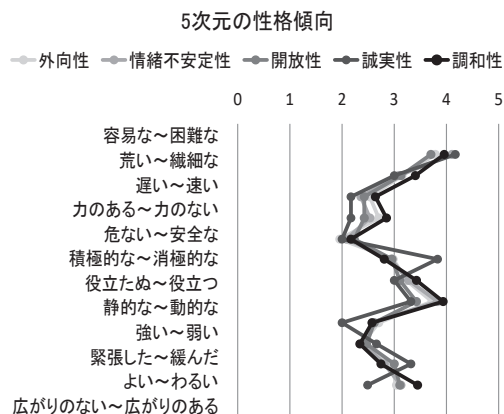


図6 5次元の性格傾向における SD 得点の平均値のグラフ (N=290)

には「容易な～困難な」が、最も得点の低いものには「危ない～安全な」の形容詞対が入っていたことから、性格傾向に関係なく非行少年の更生について、難しく且つ危険を伴うというイメージを持っていると考えられる。

#### IV 考察

##### 1. 結論

本研究は、女子大学生において、性格傾向の違いにより非行少年の更生に対するイメージに差が見られるのかを明らかにすることを目的に質問紙調査を実施し、性格傾向と非行少年の更生に対するイメージ間における関連性は見られないという結論を得た。

##### 2. 5次元の性格傾向におけるSD得点の平均値

5次元それぞれの性格傾向におけるSD得点の平均値を見た結果、非行少年の更生に対する形容詞は主に「難しく、危険が伴う」、「動きに富んでいる」、「遅いが、力のある」、「消極的」、そして「緊張した」が得られた。特に外向性群・情緒不安定性群・調和性群において、非行少年の更生には困難や危険、緊張感が伴うというイメージをもつと推察される。なかでも誠実性群に所属する人にとって更生には消極的なイメージがあるものの、動きに変化が生じやすく、特に開放性群においては、更生に時間はかかるが力はあるというイメージを持つと考えられる。

##### 3. 有意差が得られなかった要因

本研究の目的は、女子大学生において性

格傾向の相違により非行少年の更生に対するイメージに違いがあるのかを明らかにすることであった。この目的に対して、性格傾向と非行少年の更生に対するイメージの間に有意差が確認できないという結果を得た。このように、有意差が得られなかった要因として主に2点挙げることができる。

第1の要因は、形容詞対の選出を上手く行えなかった可能性がある点である。本研究における形容詞対は、Osgoodらの研究により基本的な尺度に整理された中でも最も重要とする、評価性、力量性、活動性の3種類に属するものであり、且つこれまでの研究において、3種類それぞれにおいて代表されるものを最低1つは含むように選出を行った。そのため、形容詞が抽象的となり、非行少年という刺激語との結びつきをイメージしづらかったのではないかと推察する。

第2の要因は、研究協力者内における性格傾向の分類に偏りが見られた点が挙げられる。特に情緒不安定性群と誠実性群において、前者が149人であったのに対し後者は6人と、顕著な偏りが見られた。これらのことにより、検定の結果にも影響したのではないかと推察する。

##### 4. 今後の課題

本研究における今後の課題として、①非行少年の更生に対するイメージを、例えば身体的特徴といったように、いくつかの特徴に基づく領域を設けることでより具体的な形容詞対を選出すると共に、それに対して因子分析を行うことで更に形容詞対を抽出する必要性が挙げられる。②また、性格傾向に偏りが見られた点については、私立

の女子大学生にのみ調査をしたため生じた可能性も考えられる。そのため、今後は複数の大学で調査を行う必要がある。

## 謝辞

本論文作成にあたりご指導いただきました野島一彦教授、本調査を行うにあたりご協力いただきました高木庸先生、近藤佐保子先生、石川智先生、そして菅原ゆり子先生に厚く御礼申し上げます。

## 文献

久原恵理子・宮寺貴之・藤原佑貴・小林寿一(2016)．非行少年の指導に対して教師が抱くイメージの特徴について—態度や共感性との関連から—．犯罪心理学研究, 53(2), 43-57.

河野莊子・岡本英生(編)(2013)．コンパクト犯罪心理学—初歩から卒論・修論作成のヒントまで—．北大路書房.

日本子どもを守る会(編)(2017)．子ども白書．本の泉社.

西村春夫(1991)．能動的非行少年のイメージ—非行理論における「ダメな少年」イメージの転換—．比較法制研究, 14, 81-25.

西村春夫(1982)．社会各層の少年非行観の比較分析．科学警察研究所報告, 23(1), 9-27.

西村春夫(1983)．社会各層の少年非行観の比較分析．科学警察研究所報告, 24(1), 44-62.

岡田至雄・安藤仁朗(1994)．犯罪および犯罪者に関するイメージの研究．関西大学社会学部紀要, 26(2), 1-29.

岡本英生(1997)．非行少年の少年院収容者についてのイメージ．犯罪心理学研究, 35(2), 15-27.

大庭絵里(2010)．メディア言説における「非行少年」観の変化．国際経営論集, 39, 155-164.

心理学実験指導研究会(編)(1985)．実験とテスト＝心理学の基礎, 実習編．培風館．77-79.

心理学実験指導研究会(編)(1985)．実験とテスト＝心理学の基礎, 解説編．培風館．154-157.

鈴木光太郎(1999)．心的イメージ．中島義明・安藤清志・子安増生・板野雄二・繁榊算男・立花政夫・箱田裕司(編)心理学辞典．有斐閣.